孤独感と友人関係における自己受容の関わり

○鈴木賀央里

(金沢大学大学院人間社会環境研究科)

キーワード：孤独感・友人関係・自己受容

Relation of self-acceptance in loneliness and friendship

Kaori SUZUKI

(Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa Univ.)

Key Words: loneliness, friendship, self-acceptance

目 的

落合（1989）が「孤独感とは、青年期の基本的な生活感情である」と述べているように、多くの青年が何かしらの孤独を感じていると思われる。青年期の孤独感の原因は対人関係にあるのだろうか。青年の多くは友人を作り、日常会話や悩み相談などを行っているようにも思われる。友人との上辺だけの付き合いが孤独感につながっている場合もあるが、そうでない場合、青年期の孤独感の原因には自分で自分のことを受容できていないことが関係しているのではないだろうか。本研究では、対人関係の中でも青年期に重要であると考えられる友人関係を、自分を受容できているかの指標として自己受容を取り上げ、孤独感と友人関係、自己受容の関係について考察する。

方 法

調査対象者 北陸地方の4年制大学学生132名（男性53名、女性79名）、平均年齢19.12歳（SD=0.80）。

調査時期 平成24年1月

質問紙 (1) 孤独感尺度（落合，1989）。16項目5件法。共感性と個性性の2つの次元からなる。(2) 友人とのつきあい方に関する項目（落合ら，1996）。35項目5件法。深さと広さの2つの次元からなる。(3) 自己受容測定尺度（沢崎，1993）。35項目5件法。身体的自己受容・精神的自己受容・社会的自己受容・役割的自己受容・全体的自己受容の5つの領域からなる。

結 果

まず、孤独感の共感性、個性性それぞれの合計得点の平均値で上群と下群に分け、2つの次元を組み合わせることで4つのグループに分類した。4つのグループは、共感性が高く個性性が低いA型、共感性・個性性ともに低いB型、共感性が低く個性性が高いC型、共感性・個性性ともに高いD型となっている。

続いて、従属変数に自己受容の5領域それぞれを、独立変数に友人とのつきあい方についての2つの次元（深さ、広さ）とその交互作用項を投入し、孤独感のグループごとに重回帰分析を行った。その結果、孤独感A型において全体的自己受容を従属変数としたときの広さ項・交互作用項、身体的自己受容・精神的自己受容・社会的自己受容・役割的自己受容を従属変数としたときの交互作用項、孤独感C型において社会的自己受容を従属変数としたときの広さ項、孤独感D型において精神的自己受容を従属変数としたときの交互作用項が有意であった（Table 1）。さらに、有意であった交互作用項について下位検定を行ったところ、孤独感A型における身体的自己受容・精神的自己受容・社会的自己受容・役割的自己受容・全体的自己受容、孤独感D型における精神的自己受容の全てで、友人関係が広い場合、関係が深いほど自己受容が低いことが示された。

Table 1 孤独感類型ごとの重回帰分析結果

従属変数		身体的自己	精神的自己	社会的自己	役割的自己	全体的自己
独立変数		β				
A型	深さ	-.094	-.128	-.154	-.075	-.164
	広さ	.110	.233	.258	.267	.329*
	深さ*広さ	.354*	.364*	.363*	.389*	.332*
	R ²	.126	.144	.154	.156	.157
B型	深さ	-.155	-.392	-.236	-.186	-.107
	広さ	.401	.218	.160	.269	.076
	深さ*広さ	-.118	-.361	-.359	-.401	-.214
	R ²	.207	.400	.252	.303	.074
C型	深さ	-.053	-.217	-.048	-.018	-.096
	広さ	-.064	-.271	-.457*	-.085	-.200
	深さ*広さ	-.244	-.171	-.129	.002	-.019
	R ²	.061	.117	.187	.007	.041
D型	深さ	-.012	-.234	.308	-.304	-.089
	広さ	-.004	.018	-.217	.014	-.146
	深さ*広さ	.413	.465*	-.009	.413	.266
	R ²	.167	.159	.112	.136	.102

* $p < .05$

考 察

まず、共感性が高く個性性が低い孤独感A型は、友人関係が広いときに全体的自己受容が高く、友人関係が広いときに関係が深いほど身体的自己受容・精神的自己受容・社会的自己受容・役割的自己受容・全体的自己受容が低いことが示された。友人と分かり合えると思っていながら人間は一人なのだ気付いていないことから、関係が深くなるにつれて生じる葛藤をうまく処理できず、自己受容が低下している可能性が考えられる。

また、共感性が低く個性性が高い孤独感C型は、友人関係が広いときに社会的自己受容が低いことが示された。

さらに、共感性・個性性ともに高い孤独感D型は、友人関係が広いときに関係が深いほど精神的自己受容が低いことが示された。

本調査では孤独感A型については多くの興味深い結果が得られたが、今後は他のグループの特徴や友人関係・自己受容のより詳細な関係について明らかにしていく必要がある。

引用文献

- 落合良行（1989）. 青年期における孤独感の構造 風間書房
落合良行・佐藤有耕（1996）. 青年期における友達とのつきあ
い方の発達的变化 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
沢崎達夫（1993）. 自己受容に関する研究（1）—新しい自己
受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討 カ
ウンセリング研究, 26, 29-37.